

**日本英文学会関東支部
第8回大会（2013年度秋季大会）
プログラム**

日時： 2013年11月2日（土）

会場： 日本女子大学（目白キャンパス・百年館低層棟）

〒112-8681 東京都文京区目白台 2-8-1

アクセス

JR 山手線「目白駅」下車徒歩 15 分、バス 5 分

東京メトロ副都心線「雑司が谷駅」下車徒歩 8 分

東京メトロ有楽町線「護国寺駅」下車徒歩 10 分

共催：日本女子大学文学部英文学科

日本英文学会関東支部事務局

〒162-0825 東京都新宿区神楽坂1-2

研究社英語センタービル

Tel/Fax 03-5291-1922

E-mail:kanto@elsj.org

12:15 開場・受付 (百年館低層棟 3階)				
12:30 13:30	研究発表	第一会場 (百 304 教室)	第二会場 (百 305 教室)	第三会場 (百 306 教室)
		キルゴア・トラウトの三度の埋葬—カート・ヴォネガット『タイムクエイク』の政治的読解 (発表者)一橋大学大学院 青木耕平 (司会)東京大学准教授 諏訪部浩一	「スロー」で日常的な破局— <i>White Noise</i> における汚染の表象とエコクリティシズム (発表者)青山学院大学大学院 日野原 慶 (司会)早稲田大学教授 都甲幸治	「タイプの世界」—ヘンリー・ジェイムズ『大使たち』におけるオーサーシップとジェンダー (発表者)東京大学大学院 加勢俊雄 (司会)青山学院大学教授 福田敬子
	ワークショップ (百 307 教室)	英語教育における<文学教材>の意義と実践—リーディング指導法の検討を中心に (司会・発表者)立教大学兼任講師 関戸冬彦 (発表者)戸板女子短期大学専任講師 山本洋平 (発表者)順天中学校・高等学校教諭 和田玲 (発表者)文教大学付属中学校・高等学校教諭 石井潤		
13:40 15:10	特別講演 (百 206 教室)	‘As I practised conjecture more, I came to trust it less’: Jane Austen, R.W. Chapman, and the Dark Art of Emendation Dr. Peter Sabor (Professor, McGill University) Chair: Dr. Noriyuki Harada (Tokyo Woman’s Christian University)		
13:40 15:40	英米文学部門 シンポジウム (百 301 教室)	work と 20 世紀転換期の英米文学 (司会・講師)一橋大学教授 井川ちとせ (講師)茨城大学准教授 市川千恵子 (講師)大東文化大学准教授 中垣恒太郎 (講師)東洋大学教授 村山淳彦		
15:50 16:20	総会 (百 206 教室)			
16:30 18:30	メイン シンポジウム (百 206 教室)	古典の困難—それでも、やっぱり、教えたいたい? (司会・講師)東京大学准教授 阿部公彦 (講師)慶應義塾大学教授 井出新 (講師)立教大学教授 後藤和彦 (講師)東京大学教授 高橋和久		
18:45 20:30	懇親会 (日本女子大学生協目白食堂「ランチェ」)			

開場・受付開始（12:15より 百年館低層棟3階にて）

12:30-13:30

【研究発表】

第一会場（百304教室）

（発表者）一橋大学大学院 青木 耕平

（司会）東京大学准教授 諏訪部 浩一

キルゴア・トラウトの三度の埋葬——カート・ヴォネガット『タイムクエイク』の政治的読解

ヴォネガット自身のオルター・エゴとして複数の作品に登場する架空のSF作家キルゴア・トラウトは、その生没年を二度改変されている。*Breakfast of Champions*で自由世界へと解放され1981年に死んだはずの彼は1997年発表の*Timequake*で主人公として再召喚され世界的な名声を得て作中の2001年に死ぬ。しかし2004年にヴォネガットがウェブサイトにて投稿した記事においてトラウトは再度登場し、ブッシュ大統領再選の報に絶望し自殺をする。本発表は主に*Timequake*を同時代の政治言説と歴史的な文脈から分析し、現在の地点からポスト冷戦小説として読み直すことにより、同作品が一方では「歴史の終わり」言説批判の側面を持ちつつも、他方で同時代に世界規模で進行した新自由主義の拡大と親和的であったことを論証する。新左翼的なポストモダンパロディは新自由主義状況下においてシステム批判の力を失効した。*Timequake*はそれを端的に示す「失敗した」ポストモダン小説であり、トラウトの二度の設定改変は作者によるメタ・メッセージである。

第二会場（百305教室）

（発表者）青山学院大学大学院 日野原 慶

（司会）早稲田大学教授 都甲 幸治

「スロー」で日常的な破局——*White Noise*における汚染の表象とエコクリティシズム

Susan Sontagは、著書*AIDS and Its Metaphors* (1989)の最後部で、黙示録的想像力の現代的な変容について指摘している。現代社会における破局は、共同体の外部から非日常として到来するのではなく、共同体の内部で——たとえば放射能汚染のように——日常的に「スローモーションで」進行するのだという。環境批評においても同様に、旧来の黙示録的パラダイムが不可視化する恐れのある、身体と生態系の「汚染」に象徴される内的／日常的な危機——あるいは「間延びした破局 (slow apocalypse)」——を認識する必要性が主張されてきている。本発表では、それらの議論を紹介しつつ、そのような「スロー」な破局の文学的表象の一例としてDon DeLilloの*White Noise* (1985)を分析する。そして、この小説が環境危機の認識という点に関して、旧来の黙示録的修辞を用いた文学作品とはどのように異なるのかを明らかにする。加えて、この点に関連づけて、エコクリティシズム自体の批評的な方法をどのように変容させていくべきなのかについても考える。

第三会場（百 306 教室）

（発表者） 東京大学大学院 加勢 俊雄

（司会） 青山学院大学教授 福田 敬子

「タイプの世界」——ヘンリー・ジェイムズ『大使たち』におけるオーサーシップとジェンダー

十九世紀末に登場したタイピストや電信技師という職業は、多くの女性に社会における情報伝達の媒介としての役割を与えた。しかし、口述筆記を行ったヘンリー・ジェイムズの書記であったシオドラ・ボサンケットが心霊主義に没頭したことが象徴するように、彼女たちの存在は降霊会における霊媒（medium）のそれと同じく、その徴をテキストに直接残すことは極めて稀だった。

一方で、電信技師の女性を中心人物とした中編 *In the Cage* (1898) が顕著な例であるが、ジェイムズ当人の諸テキストには新たに活字の担い手となった女性が情報伝達において屈折的な役割を果たす様がたびたび描きこまれ、公的かつ男性的なオーサーシップの背後に（口述筆記によっては掩蔽されていた）女性の書記行為をあぶりだし、可視化している。本発表では同じく活字の不透明性に関心を示したアーサー・コナン・ドイルのホームズ作品を議論のサブテキストとして用いながら、後期ジェイムズ作品、なかでも *The Ambassadors* (1903) のジェンダー・パフォーマンスにおける特異点を吟味する。

12:30-13:30（百 307 教室）

【ワークショップ】

英語教育における〈文学教材〉の意義と実践——リーディング指導法の検討を中心に

（司会・発表者） 立教大学兼任講師 関戸 冬彦

（発表者） 戸板女子短期大学専任講師 山本 洋平

（発表者） 順天中学校・高等学校教諭 和田 玲

（発表者） 文教大学付属中学校・高等学校教諭 石井 潤

現在、英語教育を巡る議論が様々な角度からなされ、関東支部 2013 年度夏季大会でも〈文学教材〉をどう教室で教えるのかというテーマの研究発表が見られた。この動向は、各分野の英語教員が〈文学教材〉の活用方法を模索しつつも、従来の英語教授法に限界を感じていることを反映している。この状況を打開するためにも、大学教員と高校教員が意見を交換することは有益だろう。

そこで本ワークショップでは、“読む”という行為が単なる“入試問題を解く”という力ではなく、また実用技能としての読解力でもなく、もっと有意義なものとして受け止められる、高大での指導法の提案を行う。

13:40-15:10 (百 206 教室)

【特別講演】

‘As I practised conjecture more, I came to trust it less’:
Jane Austen, R.W. Chapman, and the Dark Art of Emendation

Dr. Peter Sabor
Professor, McGill University

This paper will begin with a brief consideration of editorial emendation, focusing on Dr Johnson’s celebrated discussion of ‘conjecture’ in the preface to his edition of Shakespeare. I shall then turn to the groundbreaking edition of Jane Austen’s six novels edited by R.W. Chapman, first published exactly ninety years ago, in November 1923. The late Brian Southam rightly called this the first critical edition of any of the major English novelists, and it still wields a major influence today; many scholars continue to base their references to Austen’s novels on Chapman’s text. My subject is the series of emendations proposed by Chapman for each of Austen’s novels. I shall consider both the intrinsic merits of these emendations and their use by subsequent Austen editors. I shall also discuss the implications of Chapman’s decision to use, as his copy-text, the revised, second edition of *Sense and Sensibility* and *Mansfield Park*. Finally, I shall examine the emendations recorded in Cassandra Austen’s copies of her sister’s novels, comparing them with those proposed by Chapman.

While some of Chapman’s emendations, as I shall show, have justifiably won universal acceptance, I find many of them quite wrong-headed. Although a celebrated scholar of Johnson, as well as Austen, Chapman often failed to follow Johnson’s sage advice to textual editors, based on his own experience in editing Shakespeare’s plays: ‘As I practiced conjecture more, I learned to trust it less; and after I had printed a few plays, resolved to insert none of my own readings in the text. Upon this caution I now congratulate myself, for every day increases my doubt of my emendations’. Chapman, I believe, should have exercised more of the restraint recommended by Johnson, and in particular he should have refrained from inserting his conjectural emendations into the text of Austen’s novels. Textual alterations should be confined to the limited number of cases when a reading is incontrovertibly wrong, and the correction equally incontrovertible. Practitioners of the dark art of emendation, like medical practitioners, should be bound by the Hippocratic oath, *primum non nocere*: first, do no harm.

13:40-15:40 (百 301 教室)

【英米文学部門シンポジウム】

work と 20 世紀転換期の英米文学

(司会・講師) 一橋大学教授 井川 ちとせ

(講師) 茨城大学准教授 市川 千恵子

(講師) 大東文化大学准教授 中垣 恒太郎

(講師) 東洋大学教授 村山 淳彦

ディーセント・ワークという概念が、1999年、第87回ILO総会に提出された事務局長報告において初めて用いられ、2008年採択の「公正なグローバル化のための社会正義に関するILO宣言」で、ILOの政策の中核に位置づけられた。日本政府もこの概念の普及と実現に務めているというが、2012年版労働経済白書によれば、「先行きの不透明感の高まりやグローバル化による経営環境が変化する中で、定型的な業務処理や指示待ち対応でなく、状況や環境の変動に応じた労働者自身による能動的な対応を、[事業者が]労働者に求める傾向が強くな」るいっぽうで、企業による職業訓練はおもに正規雇用者を対象としているため、増加しつづける非正規雇用者層は能力開発の機会に恵まれず、正規雇用に移ることが容易でないという。だがそもそも、状況や環境の変動に応じた能動的な態度、すなわち情報とコミュニケーションに関わる skill を要求する仕事の増大こそが deskill された仕事を大量に生み、それを専らにする非正規雇用者が、加速するグローバル経済の調整弁として必要とされるのである。1919年設立のILOがみずからの再生を賭けて取り組むほど、「働きがいがあって人間らしい仕事」は困難な目標である。

20世紀への転換期、英米ではますます多くのひとが資本主義的な規律と生産諸関係に何らかのかたちで従属するようになり、賃金労働者の労働のみが生産的で、それ以外の労働は不生産的であるかのごとく見なされるようになる。同時に、市民権の拡大を目指す運動は、定住と定職、すなわち生涯を通じて単一の技能を磨き上げることを理想とし、そのモデルから逸脱するひとびとを市民の域外へ放逐しようとした。本シンポジウムでは、work という語を広義にとらえ、さまざまな work の表象を英米文学に見出し、ひとが働くことの意味を考察したい。

■ アーノルド・ベネットと clerical work

井川 ちとせ

世紀転換期のイギリスで、もっとも急速に数を増した職業集団のひとつである事務職員は、ときに熟練労働者よりも低い給与所得で口過ぎをしながら、肉体労働をしないという一事によってみずからを労働者階級と差別化した。不安定な労働環境に甘んじながらも、当時プロレタリアートのものと見なされていた組合活動に身を投じることで階級アイデンティティを危うくすることを恐れる者は多く、1890年に全国事務職員組合が発足したものの、加入者数は伸び悩んだ。同一労働・同一賃金の原則を掲げて女性を組合員として受け入れながら、男性組合員は正当な賃金を要求する

際、中産階級のドメスティック・イデオロギーに依拠して、妻子を養うに十分か否かという基準を持ち出した。他方で事務職は、まさに肉体労働を伴わないがゆえに、いわば女にもできる座業として女性化され、スティグマ化されもした。さらに速記のように数値化可能なスキルのみならず気遣いや洞察力といった抽象的かつ情動的なスキルの身体化をも期待され、余暇においてはさまざまな自己改善に精を出す。こうした新しいタイプのホワイトカラー労働の経験を、ベネットの書き物を手がかりに考察したい。

■ 世紀末の文学表象における女性と仕事——女たちの絆のゆくえ

市川 千恵子

1880年代から1890年代は、活字媒体がジェンダー・ロールの討論の場として活気を帯びた時代であった。女性たちはいかにして階級、ジェンダー、アイデンティティをめぐる問題の解決を試みながら、文化的規範を修正し、女性の仕事を公的領域に創り出しえたのか。いかなる女性たちが、職業、あるいはキャリア形成というものに意味を見出しえたのか。本発表では、女性作家による世紀末の文学テクストを中心に、都会に生きる女性と仕事の表象を読み解いていきたい。その際に、女性の高等教育改革と職業機会拡大の戦いの一つの成果として誕生した女性医師と、彼女たちが連帯のまなざしを注いだ労働者階級女性との関係に焦点をおく。まず、女性医師をヒロインとする一連の長・短編小説を中心に、性的に脆弱な若い労働者階級女性の道徳と身体守護者としての女性医師の使命というレトリックを考察する。さらに、ロンドンの貧困地区に居住経験をもつ作家の Margaret Harkness による *A City Girl* (1887) における零落した労働者階級女性の声を主体とする物語から、階級差を超えた女性同士の絆のゆくえを探りたい。

■ アメリカ大衆文化における「ホーボー」イメージの想像力

中垣 恒太郎

1890年代頃から登場した言葉であるとされる「ホーボー」(hobo)がアメリカ文化史においてどのように表象されてきたのかを展望する。20世紀への転換期から1930年代にかけて、鉄道の発展、テクノロジーの発展による労働環境の変化、不況などを背景に登場した彼らの姿は、Woody Guthrieらフォーク・ソングに代表されるように、「民衆」の文化としてのアメリカ大衆文化の想像力に多大な影響を及ぼしてきた。Jack Londonによる小説、*The Road* (1907)、およびその小説の記述を参照することにより成立した、映画 *Emperor of the North Pole* (1973)の分析を軸に、アメリカ大衆文化における「ホーボー」イメージの変遷を展望することにより、アメリカ大衆文化の源泉を探っていく。Jack Kerouacによる“Vanishing American Hobo” (1960)をはじめとする、ビート・ジェネレーションやアメリカン・ニューシネマにおけるロード・ムービーなど後世の大衆文化への連関や、あるいは21世紀初頭のアメリカにおける「現在」の渡り労働者の実態などをも比較参照することにより、20世紀以降のアメリカにおける労働をめぐる諸問題が浮かび上がってくるのではないかと。

■ 仕事についてドライサーはどう書いているか

村山 淳彦

ドライサーの少なからぬ著作では、労働ないし仕事为主题化されている。とりわけ小説第1作『シスター・キャリー』では、この特徴が顕著である。小説のプロットは、主要登場人物たちの労働ないし仕事の変遷をめぐって展開されるからである。作品中キャリーは3回、就職活動をする姿であらわされ、その首尾がことごとくキャリーの境遇の大きな転換へつながる。最初はシカゴへ出てきたばかりの段階で求職の苦勞の末、ようやく製靴工場女工の口にありつく。第2回目は、冬に入って風邪を引いたために女工の職を失い、あらためて新しい就職先を求めて街をうろついているうちにドルーエと再会して、その困い者（疑似妻）になるという行き場（仕事）を見出す。第3回目は、ハーストウッドが頼りにならなくなったので、ニューヨークの劇場街を駆けずりまわったあげく、ようやくコーラスガールとして雇われ、芸能界で働きはじめる。他方ハーストウッドも、キャリーとの浮気が躓きのもととなって酒場の支配人の仕事を失い、ニューヨークでさまざまな職に就くものの、落ちぶれる一方。ついにはストライキ破りにまで身を落としたあげく、浮浪者となって自殺する。このようなシューカツ小説は、労働ないし仕事の意味にたいする考察を促さずにおかない。ドライサーが仕事についてどう書いているか、おもに『シスター・キャリー』を読み返しながら考えてみたい。

15:50-16:20 (百 206 教室)

【総会】

16:30-18:30 (百 206 教室)

【メインシンポジウム】

古典の困難—それでも、やっぱり、教えたいたい？

(司会・講師) 東京大学准教授 阿部 公彦

(講師) 慶應義塾大学教授 井出 新

(講師) 立教大学教授 後藤 和彦

(講師) 東京大学教授 高橋 和久

古典には加齢臭が漂っている。古典というだけで、きっと若い若者は嫌がりそうだ、と私たち老人は思いがちである。しかし、若者はむしろ権威やブランドに弱い。マイナー作家や、古典外作家をとりあげると、むしろ変な顔をする。

古典を読ませることの困難は、まさにそこから来るのかもしれない。古典をありがたがろうとするあまり、思考停止する危険があるから。

今回のシンポジウムは、関東支部恒例の「文学教育をどうする？」的課題の一環として、古典を

教えることのたいへんさについて話し合う。すでにレジユメの段階から「たいへんさ」臭がにじみ出ているのである。

■ 「シェイクスピアは死んだ」のか？

井出 新

シェイクスピアが巷にあふれている。劇場や映画、漫画、インターネット、気軽にどこでも楽しめて、面白く、しかもわかりやすい。私の机の上では、シェイクスピアの「ゆるキャラ」首振り人形がこちらを眺めている。シェイクスピアがこれだけ手軽で身近になれば、「常に歴史化せよ」という批評の動向と相俟って、「古典」や「権威」という言葉はそのうち意味をなさなくなるだろう。一方、そうした物わりの良いシェイクスピアを尻目に、ひたすら原文にかじりつく大学での演習は、お通夜のような重苦しさに支配される。面白いものが必ずしもわかりやすいとは限らない——その現実には多くの学生が打ち拉がれ、日を追って一人また一人と教室を去って行く。「教員資質能力の向上」を声高に叫ぶ文科省の批判は甘んじて受けるつもりだ。ただ、理解が困難だったからこそ、文化的・言語的距離感が存在したからこそ、「シェイクスピア研究」が生まれ、「古典」が誕生したのではなかったか。今一度、「古典」としてのシェイクスピアは死んだのか、自己反省を交えつつ考えてみたい。

■ 嫌がる学生に無理矢理詩を読ませることについて

阿部 公彦

筆者の担当は詩である。多くの学生にとって詩は、日本語、英語とも未体験ゾーンである。「オギワラサクタロウって誰？」という人がいたりする。当然、拒絶反応も強い。なので筆者の作業は、まず、この未体験アレルギーを取り除くところから始まる。古典を前にして思考停止する頭に多少なりとマッサージを施そうとしてきた。なかなかうまくいかないのだが、筆者の血と汗の滲む苦闘の跡を振り返りつつ、何がいけなかったのかを、みなさんの助けを借りつつ反省したいと思う。話の枕とするのは四元康祐の「名詞で読む世界の名詩」。それからオギワラならぬ萩原朔太郎、イギリスロマン派の詩人やディキンソンなども取り上げたい。

■ 黒人を描く

後藤 和彦

「古典」をどう定義するのかによるだろうが、おそらく「大衆文学」というのはその対極あたりにあると言ってよかろう。アメリカの文化全体にとって「大衆性」とは、うっかり粗雑には扱えない事柄だから、アメリカ文学の作家の場合、「古典」への衝動に内側からブレーキがかかるといった奇体な事態さえ想定しておかねばならないだろう。いや、「大衆小説」の対極にあるのは、まず「純文学」と言うべきなのであって、となると、「純文学」への衝動と「大衆性」志向とのせめぎ合いこそが、すなわちアメリカ文学における「古典」性の根拠かもしれない——といった暗中模索のうち、とりあえずストウ夫人からトウェインを経由してフォークナーに至る黒人表象に注目して、「大衆性」と「純文学」という2つの変数の絡み合いの時代変遷についてゆる目の話をしつつ、それぞれを大学のテキストとして実際に用いた場合の感触なども思い出し思い出しお話しする。

■ 押しても駄目なら引かれてしまえ

高橋 和久

英国小説の古典について何か話せということですので、小説は授業時間だけでは読み終わらないというジャンル共通の困難を、筋を追うだけでは小説を読んだことにならない、という意味に翻訳した上で、ディケンズの『大いなる遺産』を取り上げることにします。たまたま今年、授業で読んでいるからというのが理由です。古典だから／古典なのに、辞書を引かず、翻訳に頼る学生にとってこの作品の何が面白くて何がつまらないのか、原作を換骨奪胎したハリウッド映画版も参照しながら、考えたいと思います。とはいえ、教室で学生を面白がらせる工夫などというものを格別しておりませんので、愚痴めいた授業報告になるのではないかと本気でおそれつつ、皆様がよい知恵を授けてくださるのではないかと図々しく考えております。それがわたしの「大いなる期待」です。

懇親会 (18:45-20:30)

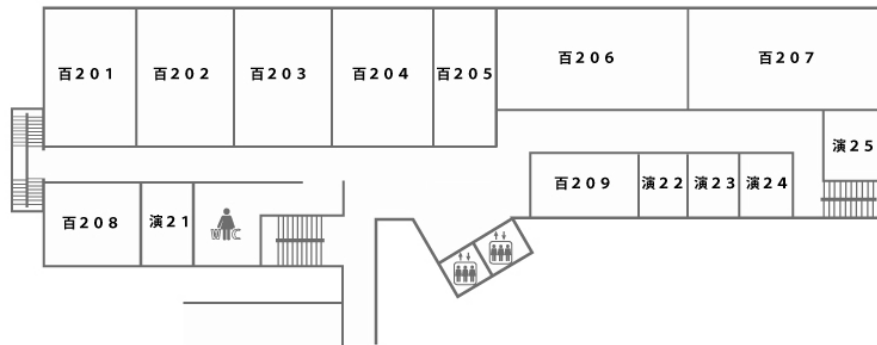
会場 日本女子大学生協目白食堂「ランチェ」

会費：4,000円（学生2,000円）

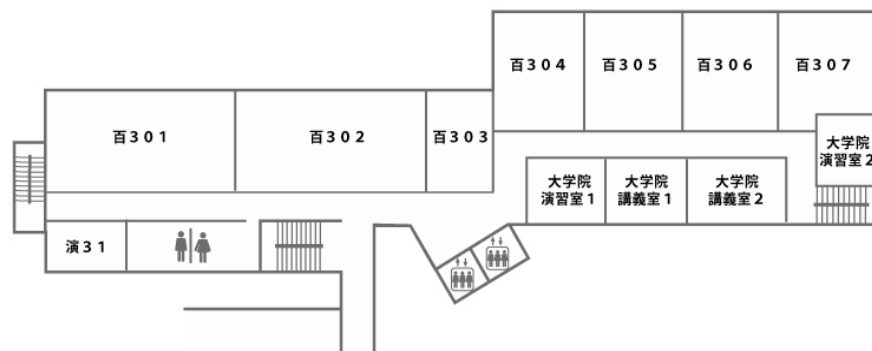
事前申込は不要です。奮ってご参加ください。

会場マップ

百年館低層棟 2 F



百年館低層棟 3 F



会場アクセスマップ

最寄り駅から

- JR 山手線「目白」駅
徒歩：約 15 分
【都営バス（学 05）】
日本女子大学前行
【都営バス（白 61）】
新宿駅西口行、または
ホテル椿山荘東京行
- 東京メトロ副都心線
「雑司が谷」駅（3 番出口）
徒歩：約 8 分
- 東京メトロ有楽町線
「護国寺」駅（4 番出口）
徒歩：約 10 分

